

平成15年度第3回学術講演会（講演抄録）

翻訳・その思想と現場の問題

Translating: Theoretical and Practical Issues

講師 Ralph Degen(ラルフ・デーゲン)

(香川大学 外国人講師)

翻訳された文学を読む時、誰もが翻訳を読んでいるということを意識しているわけではない。特に外国語の出来ない人は翻訳がどういうものかをあまり考えたこともなく、原文の正確なコピーだと思うのではないだろうか。しかし翻訳文とは原典（オリジナルの文章）の一対一コピーとは程遠いものである。それは字幕のついている英語の映画を観る視聴者のうち、英語がわかる人と字幕を読む人がかなり違うところで笑うことから察することが出来る。もちろん文学の翻訳と映画の字幕は同じものではないが、原典と翻訳文の差という同質の問題をもつ。ここでは原典と翻訳文を仲介する翻訳の作業に起こりえる諸問題がどれくらい広範囲にわたるかを論じていきたい。

1. 実用文と文学の翻訳

本題に入る前に文学翻訳と実用文翻訳の違いを少し説明しなければならない。

実用文（マニュアル、論文、契約書、ビジネスの手紙など）を翻訳するのは原典の言語が出来るその分野の専門家が多い。一方文学（小説、詩など）の場合は起点言語を専攻としている言語学者、文献学者が多い。

実用文の場合は通知だと思えばいいのであって、言葉はただの手段であり内容のみを出来るだけ確実に目標言語に転移すれば充分である。しかし文学（文芸作品）を翻訳する場合には内容と形式が同じくらい重要になる。つまり言葉（文体）も出来るだけ忠実に目標言語に残さなければならないのである。したがって文学の翻訳者は必ず外国語から自分の母国語へと翻訳することになる。

言うまでもなく文学作品の多様性の範囲は実用文のそれよりもはるかに広い。一つの小説にいろんな文体の形式が含まれている場合も多い。例えば方言、俗語の会話、手紙、思想的な文体、詩などである。このように各起点言語の特徴が多く、しかも文体の特徴と原文の読者が受けるであろう感銘をも保つことが翻訳の前提となるわけだが、そういう起点言語の個性的な部分に対応する目標言語の表現すら存在しない場合も少なくないのである。

また実用文の場合、原典の読者と翻訳文の読者の常識はある程度共通している（医学論文の読者は医学の専門知識を持ち合わせているなど）。文学では暗示的な意味と文化の背景が大いに関わってくるので、両者の読者の常識に共通しない範囲が広がる。

この論文が対象とするのは主に文学の翻訳である。

2. 翻訳論の対象と課題

翻訳論の課題とは、基本的には翻訳の過程を記述するため、または翻訳文を批判するための理論的・方法論的な基礎を築くことである。そこには二つのアプローチを見ることが出来る。翻訳過程の認識作用、つまり翻訳者の頭の中に何が起るかを記述することと翻訳結果である翻訳文の批判・評価である¹。言い換えれば原典と翻訳文の等価（equivalence）関係を明らかにすることである。

ほかの理論と同じように翻訳論についても記述的な理論であるか規範的な理論であるかという疑問が生じる。つまり翻訳論は翻訳の作業または原典と翻訳文の等価関係をただ記述するだけのものか、それとも翻訳の実践のための規範的な規則をたてることが可能なのか。翻訳論についての文献の中では翻訳にかかわる変項（状況による要因²）があまりにも多過ぎるため、翻訳論は規範的ではなく記述的であるという意見が多数を占める³。つまり一般的な規則を作ることが出来ず、翻訳者は状況に応じて適当な方法を探しかないということである。したがって翻訳論の課題とはむしろ翻訳作業中に起こりえる諸問題に対応する方針をどう決めればいいのかを援助すること、そして自分の翻訳文を弁解するための基礎的な理論を翻訳者に与えることということになる。それはまた翻訳者の養成にも役立つことである。

3. 翻訳の作業を記述する

ここで翻訳作業を二つの観点から論じたい。一つは翻訳の作業をコミュニケーション行為として見る語用論的な観点、そしてもう一つの観点は原典と翻訳文の情報がどういう風に一致（等価）するようになるかを分析することを目的とする。

3.1. コミュニケーションの観点から見た翻訳

多くの学生は翻訳の課題をだすと、まず文章中の単語を辞書で引き、一対一で目標言語の単語に書き換え、それらの単語を原文中の接続詞を見ながら繋げて日本語の文章にする。ところがこうして自分で翻訳した文章の内容を自分の言葉で言いなおしたり、または意味を具体的な例をつかって説明することが出来ない場合が圧倒的に多いのである。こういう文章は翻訳とは呼べない。

翻訳というのは原典の作者の言いたいことを目標言語に転移することである。その「作者の言い

たいこと」の意味はそれが発言された場面を配慮しなければ理解出来ない。例えば「雨が降っているよ」という簡単な文章は場面によって語用論的な意味が変わる。お母さんがその文を家を出ようとしている子供に言ったのなら「傘を差しなさい」という意味があるかもしれない。夫がそれを妻に言ったのなら「早く洗濯物を入れたほうがいい」を意味するかもしれない。翻訳するとき文章の文字通りの意味だけではなく、言いたいこと（内容と場面を融合したもの）を何とか目標言語に転移してみなければならない。そのためには原典の暗示的な意味をその異文化の背景をよく知らない翻訳文の読者に伝える必要がでてくる。そして文芸作品の場合にはその文体も何とか目標言語に伝えてみなければならないのである。

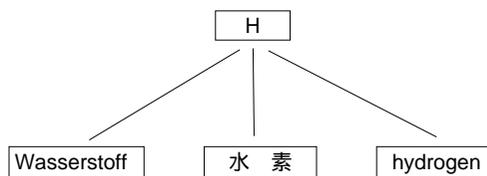
翻訳作業自体をコミュニケーション行為と見做すことも出来る⁴。そのコミュニケーション行為にかかわっているメンバーは少なくとも四人である：原典の作者と原典の読者、そして翻訳者と翻訳文の読者である。他のメンバーも幾つか考えられる。例えば出版社⁵、検閲局、スポンサー⁶などである。ここでの翻訳者の役割は原典の作者の意図を翻訳文の読者に伝えることである。そのためには言語圏と文化圏の間に仲介しなければならないので、翻訳は言語学の範囲を超え、文化人類学、社会民俗学などの専攻にもかかわって来ることになる。ゆえに翻訳とは学際的な学問といえる。

原典の言語と文化圏が翻訳文の言語と文化圏に遠ければ遠いほど仲介するのが難しく（不可能に）なり、共通点があればあるほど簡単（可能）になる。文化圏よりはコミュニケーション圏と言った方がいい。同じコミュニケーション圏に参加する人は同じ常識（共通している知識）がある。平安時代の常識と言葉は今の日本の常識と日本語とは違うので「源氏物語」の現代語訳がある。インドとアメリカで話される英語はほぼ同じだが、文化的背景とコミュニケーションの様式が違う。スイスではドイツ語、フランス語、イタリア語と三つの言語圏があるが、コミュニケーション圏は大体統一している。同じ文化圏と言語圏の中でも社会階層によって常識とコミュニケーション様式が一致していないこともある。翻訳作業の条件と要因は場合によって大いに異なるのである。

3.2. 等価の観点から見た翻訳

その条件と変項の多様性の中で原典と翻訳文の等価性を求めなければならない。千差万別の原典と翻訳の間に共通していない要素⁷のほかに両者に共通している意味的な核心も見つけなければならない。原文と翻訳文のほかに梃子の支点としての比較のための第三者（*tertium comparationis*）があれば一番いい。自然科学の分野ではそういうものがある程度存在する。例えば元素はそうである。日本語の水素、ドイツ語のWasserstoffと英語のhydrogenはまったく同じ意味で、一つの言葉以外の十分に定義された第三者 H で表される物を指す。

図1 tertium comparationis
比較のための第3者・テコの支点



フェルメールが指摘したように、文学の場合にはそういう比較のための第三者は殆ど存在しない⁸。なぜならどの発言ももともとある言語圏とコミュニケーション圏に属するからである。水素のような単純な意味上の単位は非常に珍しい。「家」のように簡単に見える単語でも文化と言語のコンテキストに繋がっている。違う文化圏の人は「家」という単語を聞くとかなり違うものを想像している。もちろん日本人も皆同じような家を想像しているわけではないが、木造の伝統的な家をすぐ想像しなくても縁側、障子、畳、土間などを必要なときに連想できる。あるモノ・単語・発言に関する連想、言い回しなどは言語と文化圏のコンテキストから切り離せないものなのである。

そこで翻訳作業を原典と翻訳文の等価関係の観点から論じるためにナイダ (Eugene A. Nida) のモデルを紹介したい⁹。それによると翻訳作業は三つの段階で行われる：

1. 分析¹⁰：翻訳者による原典の分析・解釈。起点言語の普通の文 (sentence)、つまり起点言語の文法上・表現法上などの特徴の多い文化圏による常識を含んでいる文を簡単に暗示的な意味も明示的にした核文 (kernel structures) に分解する。
2. 転移：分析された起点言語の核文を目標言語の核文に転移する。核文レベルでは言語間の違いは表層レベル (普通の文のレベル) より少ないので、翻訳が割と簡単である。
3. 最構造化¹¹：原典の長さや文体を配慮しながら、目標言語の核文から出来ている文章を表層レベルの文から出来ている (普通の) 目標言語の文章に書き換える。

3. 2. 1. 原典の分析 (コード解読)

原典の分析をするには文章の意味、つまり作者の言いたいことを徹底的に把握して明示的にする必要がある。そのためには文の構成要素 (単語・意味上の単位) とそれらを繋げる文法を意味的に明らかにしなければならない。

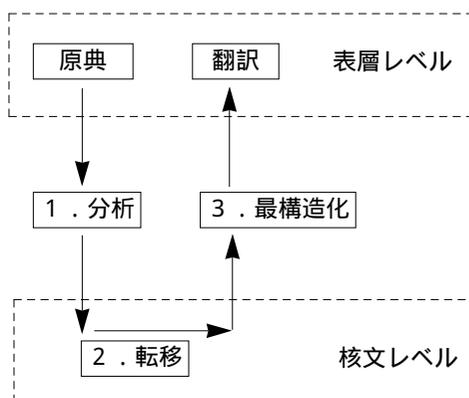
文法的な関係は簡単な例を挙げれば「猫は魚を食べました」という文で誰が誰を食べたかを定めることである。この文では構成要素の文法的関係ははっきりし

ているが、いつもそんなに簡単に決めることが出来るとは限らない。例えば「最新日本語読本」という表現では「最新」という形容詞はどの名詞に対応するかを決めることはそう簡単ではない¹²。

そこでは基本的に三つの意味のレベルがある：明示の意味 (denotative meaning)、指示の意味 (referential meaning、文脈の前後関係から明らかになる意味) と暗示の意味 (connotative meaning) である。

明示の意味は上記で述べたように、例えば「水素」のような一つの単語が直接実際に存在するも

図 2



のまたは事情を指す。これは一番解りやすく翻訳しやすい意味であるが、特に文学の場合にはその単語のもつほかの意味も考慮に入れなければならない。文脈の前後関係から明らかになる意味を表す単語が起点言語と目標言語では違う意味上の範囲をもつ場合などが例としてあげられる。英語の動詞「run」は日本語で「走る」、ドイツ語で「rennen」というが、下記の表を見ればよく分かるように場合によって日本語とドイツ語では違う単語を使わなければならない。

英語	主語	日本語	ドイツ語
run	足がある場合	走る	rennen
run	乗り物の場合	走る	fahren
run	液体の場合	流れる	fließen

そこでどの単語を使わなければならないかを文脈の前後関係から決めることになる。それは当然のことに思えるのだが、機械翻訳ではこうしたことがよく誤訳の原因になる。単語だけではなく文も前後の文脈を配慮しなければ正しく解釈出来ない場合が多い。「彼は好き嫌いが激しい。豚は食べない」という発言では、前の文によって「豚は食べない」という文の「豚」を目的語として解釈するのが常識である。しかし大体の翻訳ソフトが「豚」を主語にしてしまう。一文切り出し様式で翻訳するからである¹³。同音同形異義語の場合もどの意味で翻訳すればいいかを考えなければならない。「Mit Kohle ist man auch als Dicker gefragt」という文章でKohleは普通に意味する「石炭」ということではなく、「お金」の俗語のことである。つまり「石炭があればデブでももてる。」ではなく「金持ちならデブでももてる。」と翻訳することになる。翻訳ソフトにとってそういう問題は非常に解決しにくいものだが、人間にとってはそう難しいことではない。

最も難しいのは三つ目の意味の問題、暗示的（内包的）意味の部分である。明示的な意味以外にそういう暗示的意味があることさえ見逃しやすい。起点言語とその文化圏、または原典が書かれた時代の事情と作者のことを良く知らないと単語や文の暗示的意味を把握することが出来ない。起点言語の読者も全部の暗示的意味に気が付くとも限らない。例えば普通とちょっと違う言葉遣いなどに暗示的な意味（皮肉など¹⁴）がある場合など起点言語の母語話者でないものには非常にわかりにくい。そこでは母国語者の読者も皆同じ解釈をするとは限らないので、当然翻訳者自身の翻訳を基にする解釈も必ずしも唯一の正しい解釈ではないことを理解していなければならない。原文と翻訳文の大きな違いはつまり作者が書いた文章がすでに他の人に解釈されているということである。そしてその解釈を読者が後から知る手段はあまりないのである。

文化圏と文学ジャンルによって決まっている連想を呼び出す単語も少なくない。例えば和歌の場合には「袖」が「涙・泣くこと」を連想させることを知らないと「袖」という単語の意味を完全に

把握することができない。しかも和歌の翻訳にそういう連想・暗示的意味を導入するかが問題となる。直接翻訳文に入れることは原典を変えることになる。注・脚注などをつけるのはあまり詩的とはいえない。解決策としては翻訳文のまえに小さい導入の文章を入れることも出来る。あるいはたくさん和歌を翻訳し、読者がそれらを読みながら自然に「袖」の暗示的意味と使い方がわかるようになることに望みをかける。

原典を核文構造に書き換えるときは、明示的以外の意味とあまりはっきりしていない単語間の文法的関係を明示的にしなければ成らない。例えば日本語では主語が書かれていない文が多いのでそれを補わなければならない。下記に原文から核文への書き換えの具体的な例を一つ挙げた。パークリの『視覚新論』¹⁵最初の二条である：

原典の文	核文
It is, I think, agreed by all that distance, of itself and immediately, cannot be seen.	Seeing distance itself immediately. That is impossible. Everyone agrees to that. That is what I think.
For distance being a Line directed end-wise to the eye, it projects only one point in the fund of the eye, which point remains invariably the same, whether the distance be longer or shorter.	Distance is a line (<i>between the eye and the object, the eye sees</i>). It points from the eye to the object. It is projected in the fund of the eye (<i>on the retina</i>). There it has the form of a point. The distance is long.: It is a point. The distance is short.: It is also a point. Long distance or short distance: both are projected in the same way. Therefore distance itself cannot be seen.

3. 2. 2. 転移

起点言語から目標言語への転移は両言語の核文レベルの間で行われる。その理由は核文レベルでは意味上の単位とその間の文法的関係が一番明確であることと両言語の間の違いが表層レベルでより少ないからである。それは各言語の特徴と作者の文体の影響が薄くなるからなのであるが転移の際に情報の喪失とある程度の歪みが生じるのは回避できない。原典の文学的な価値が高ければ高いほど、つまり起点言語の特徴と表現方法をうまく生かしてあるものほどその喪失は多くなる。

もちろん単語の数がかかる。品詞も変わる。例えば英語・ドイツ語で形容詞を使うときに日本語では動詞を使うことも少なくない。英語の「dry」、ドイツ語の「trocken」という形容詞は日本語では「乾いている」という動詞で表現される。「I am terribly hungry.」という文を「俺はひどく食欲的だぜ」のような文で翻訳するのはとても不自然である。文の構造が違って「すごく腹減った」のほうが忠実な翻訳といえる。

翻訳の際に単語と文（音韻・統語・語彙）のレベルでは変更が多いが、作品全体の構造はあまり変わらない。先のパークリの例を英語の核文から日本語の核文に転移すると右記ようになる：

英語の核文	日本語の核文
Seeing distance itself immediately.	距離それ自体を直接的に見る。
That is impossible.	それは不可能である。
Everyone agrees to that.	誰もが同意する。
I think so. (That is what I think)	と私は思う。
Distance is a line (between the eye and the object, the eye sees).	距離とは目とその目が見る対象物との間の直線である。
It points from the eye to the object.	目から対象物の方向へ向かう。
It is projected in the fund of the eye. (<i>on the retina</i>)	目底（網膜）に投影される。
There it has the form of a point.	そこに点の形がある。
The distance is long.	距離が長い。
It is a point.	点である。
The distance is short.	距離が短い。
It is a point.	点である。
Long distance or short distance: both are projected in the same way.	長い距離でも短い距離でも同じように投影される。
Therefore distance itself cannot be seen.	だから距離自体は見るができない。

英語と日本語は程遠い言語なのに、上記の文を比べたら構造がかなり似ている。

3.2.3. 再構造化

三番目のステップは目標言語の核文に転移された文章を普通の言葉に書き換えること、つまり再構造化である。この作業では翻訳者は原典の文体や原典と翻訳文の読者の常識を配慮しながら、文章の情報を出来るだけ喪失を出さないように新たに秩序だてる。ここで配慮しなければならない基本的な要素が三つある：

1. 原典の文学ジャンル

2. 原典と翻訳文の対象となる受信者（読者）：原典と翻訳文のターゲットグループの常識の違い。
原典と翻訳文の読者はどれぐらいの知識があるのか¹⁶。ここではもちろん出版社、検閲機関などがかわってくることもある。

3. 文体の同一性：どうやって原典の文体を目標言語で再現するか。方言で書かれた会話を目標言語でも方言で書くべきなのか。それはとても難しい問題である。例えば高知弁からは竜馬、男らしい、深い谷、田舎、酒に強い、太平洋、台風などいろいろと連想される。しかし他の言語には高知弁を聞いたり読んだりしたときと全く同じ雰囲気が湧いてくる方言はもちろんない。そこでドイツ語への翻訳の際バイエルン弁に置き換えるとなると、連想されるものが全然違う

ため、大きな歪みが発生することになる。

形式に関しては例えば俳句を目標言語に5 - 7 - 5で翻訳すべきかななどの問題もある¹⁷。又は起点言語であり違和感を呼ばない表現方法は目標言語で違和感を起こす場合にはどうすればいいか。サイデンスティックカーは日本語では人が泣くことを明示的に表す単語が多いのでたまたま省いたほうがいいと出張する¹⁸。なぜならそれらを一々英語に翻訳するとむしろ滑稽なことになってしまうからである。

原典の文体を目標言語で再現することは決して客観的なことではない。翻訳者の趣味が大いにかかわってくる。特にこの問題については普遍的かつ規範的な規則をたてることは出来ない。

日本語の核文	日本語の表層レベルの文
距離それ自体を直接的に見る。それは不可能である。誰もが同意する。と私は思う。	距離が、それ自体としては、そしてまた直接的には、見るができないものであるということについては、誰もが同意するであろう。
距離とは目とその目が見る対象物との間の直線である。目から対象物の方向へ向かう。目底（網膜）に投影される。そこに点の形がある。距離が長い。点である。距離が短い。点である。長い距離でも短い距離でも同じように投影される。だから距離自体は見るができない。	距離は端点を眼にまっすぐに向けた直線であるから、それは眼底に、ただ一点をしか投影しない。その一点は距離が長かろうと短かろうと、全く普遍である。 ¹⁹

4. 妥協としての翻訳・翻訳の矛盾

翻訳者が翻訳作業の際に取る方針は、大きく二つのグループに分けることが出来る。ここではその両極端の立場を比較してみたい。一つはシュレーゲル²⁰などを代表とする自由訳（意識、改作）の立場を取るもので、原点を間接的に見るべきだと主張する。そしてもう一つはシュライエルマッハー²¹などに代表される直訳（忠実訳、逐語訳）とよばれるもので、こちらは原典をできるだけ直接的に見る立場をとる。

まずは読者に与える印象であるが、自由訳の場合は、文体が普通で自然であるため、まるで作者がはじめから目標言語で書いたかのような印象を与え普通に読むことが出来る。一方直訳のほうは、不自然さから起点言語が透けて見え、すぐに翻訳であることが判ってしまう。

自由訳の作業目的はあくまでも原典を完全に目標言語化することである。読者の常識の違いなどでどうしても理解しにくい部分は、他に解説や補足を付けそれを補う。また必要とあれば要約したり短縮することもあり得る。一方直訳の場合は、文章の形に一切手を触れないことを原則としてい

るため、起点言語に影響された学問的言語といった様相を呈してくる

自由訳の例としてアイブ²²が翻訳したプラウトゥスの喜劇があげられる。アイブは紀元前200年にローマでつくられたこの作品の舞台を完全に15世紀のドイツに書き換えてしまった。翻訳とはテーマを翻訳することであり、原典と翻訳文の趣旨の統一性を狙うという自由訳の立場の場合は、このような目標言語による大胆な改作もあり得るのである。冗談を目標言語圏の違う冗談に置き換えるといった手法もこうしたコミュニケーティブ効果（communicative effect）を狙った同種の手法だ。こうしたことにより原典の読者が受ける印象をなるべく残そうとするのである。母国語の作品のように簡単に早く読めるが、一方で原典の多くの部分が犠牲にされる。また翻訳者が解釈する割合が高くなるため、翻訳者が作者を熟知していることが条件となる。自由訳のターゲットになる読者は一般大衆が主である。

一方直訳の例としてはヴィーレ²³の主張が挙げられる。彼は出来るだけ文字通りに翻訳するべきであり、作品の形式は一般人の理解より優先されるべきだと語っている。単語ごとの忠実な翻訳、又は原典の行間に書き込んでいく形式をとる逐語訳はそれ自体が元々の作品を代表しているものではなく原文を読むための手助け的な働きをする。原典の言い方を完全に残すために目標言語を起点言語の表現方法に無理にあわせる。冗談にしてもなぜこの冗談が面白いのかを調べているうちに面白くなくなってしまう、あるいは冗談自体に全く気がつかないなどということも起こり得る。つまり原典の読者が受ける印象は残らないのであるが原典の形式はある程度見えているということになる。こうした翻訳を読む読者には起点言語とその文化圏の知識が必要になる。読者自らが解釈する割合が高くなり、翻訳作業に参加しているといってもよい。したがって当然読むのにも時間がかかる。直訳の読者層は学者、専門家などの特別な教養のある人が多くなる。

自由訳と直訳の両極について述べたが、実際にはどちらか一方の極端な立場をとる翻訳者は少ない。つまり現場では両極間での柔軟な判断が要求されるということである。この件に関して歴史上の著名な翻訳者、翻訳論者の言動をいくつか挙げておく。

フンボルト²⁴は自由訳に近い立場をとりながらも、理解できる範囲内で外国語らしさを漂わせるべきだと言っている。ルター²⁵は聖書翻訳の際、大衆の中で使われている言葉を基準に翻訳したのだが、大切なポイントとなるべき部分では直訳に近い方法を用いている。フレーザー・タイトラー²⁶は内容一致と文体一致は同じくらい重要であると言い、フェルメールは効果と内容の関係は翻訳者が決めるべきであると主張する。これに対してカールソン²⁷は読者には翻訳者の意図を知る権利があると語っている。しかしそこでは翻訳者が透明人間ではなくなることが問題になる。

5．翻訳の功績と思想史上の翻訳の理性化

5．1．翻訳の功績

ここで翻訳の二つの大きな功績を述べなければならない。一つは文化交流への貢献、もう一つは目標言語の歴史的発展への貢献である。

翻訳は文化交流に役立つことを特に説明する必要もないが、ドイツ思想史上の有名人の発言を少し挙げてみる。シュライエルマッハーはドイツ語の翻訳文学によりヨーロッパの中心で全人類の知恵のアーカイブが発展すると予言した。今は英語のほうがアーカイブであろうが、一つの言語がそういう役割を引き受けることも悪くない。英語さえできれば今ではほとんどの国の文学作品が読めるようになった。ゲーテ²⁸は世界文学の時代を進めることに誰もが努力するべきだと述べ²⁹、翻訳を非常に奨励した。「翻訳の不十分さについてたとえどう言われようと、翻訳というものはやはり、一般的な世の営みのなかで最も重要で価値のある仕事の一つであることには変りがないからです。」³⁰

確かに人間は知らないことを恐れるので、各文化圏や各国の間に翻訳を通して相互的な理解を発展させることが非常に大切である。日本も最近自国の文学を外国に紹介することに努力し、英語・外国語教育でもいわゆる発信型の方向（日本のことを外国に紹介できるような英語・外国語を身につける）が盛んになってきた。それは日本の国際的な立場にとっても有利なことだと考えられる。70年代、80年代日本からはモノばかりが輸出され、文化、思想、文学にほとんどアクセスできなかったがために、欧米の国々から怪しまれたことも少なくなかった。

翻訳の文化交流ほど一般的に知られていないのは翻訳の各言語の発展への影響はどれくらい強いかということである。思想的な内容だけではなく、各言語の語彙の大きな部分は翻訳に由来する。ドイツ語の場合は特にそうである。他のヨーロッパの言語と同様にとくに抽象的な語彙はラテン語・ギリシャ語系に由来している。語彙だけではなく文学ジャンルも翻訳文学によって発展したが、ドイツ語の発展に一番大きい影響を与えたのは多分ルターによる聖書の翻訳であろう。当時、ドイツ語には統一された文語がなかったため、ルターは街中の庶民の話し方を調べながらそれを自分で作らなければならなかった³¹。偶然にもほぼ同時期にグーテンベルクの印刷技術が普及されたこともあり、ルターの聖書翻訳はドイツ語の発展に大きく貢献することになった。ゲーテもルターのおかげでドイツ人は一つの民族になったと述べている。もちろん歴史が進めば進むほど翻訳の各言語の発展への影響は弱くなる。現代ではコンピューター、IT、技術、自然科学系の語彙の英語からの影響力が一番目立つ。ドイツ語の場合、そういう新しい単語の発音が不明な場合が少なくない。特に略語はそうである。その代わりに英語のマニュアルなどを読むときには単語が同じなので、大変便利である。日本語の場合はカタカナが多くなる。発音はそこでは問題ないのだが、英語の文章を読むときにカタカナ語に対応する英単語を認識することが難しくなる。

5.2. 認識論からみた翻訳

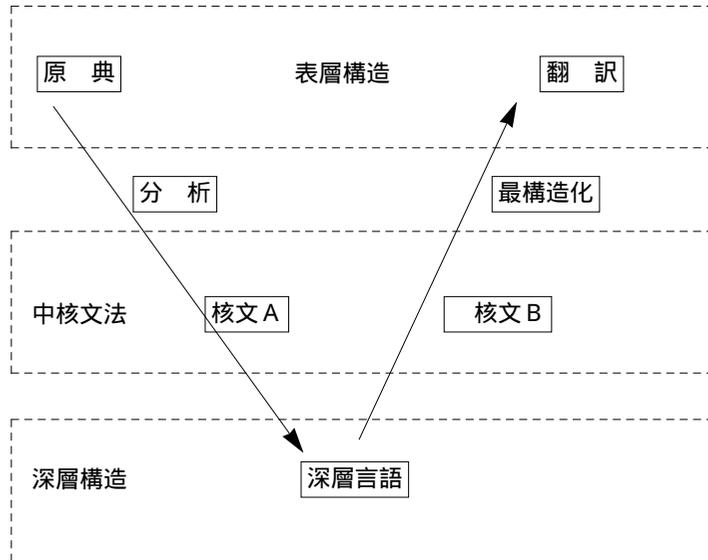
目標言語への影響と文化交流への貢献のほかにも翻訳に対しての哲学的・認識論的考察もいろいろとある。その中である純粋言語を巡る思想が特に目立つのでここで少し紹介したい。

フンボルトは翻訳を通してすべての言語の中心ともいえるものを見つけられることができると語っている。このすべての言語の中心とはベンヤミンによって純粋言語と名づけられたもので、彼によるとこの純粋言語を掘り出すことこそが翻訳者の課題であるという。先験的にはどの言語も全体が内包するものは同じで、表現の形態が違う。この各言語による表現の違いによって不明瞭になっていた本質的な真実が翻訳によって認識できるというのである。これは各言語間共通の内包的関係を体現化することであり、言語を客観的に見るができる翻訳者によって可能である。作者は母国語を客観的に捉えることはできない。それは森の中では木を見ることができて森の全体像が見えないのと同じことで、森を見ることができるのは森の外にいるものなのである。翻訳中には目標言語の範囲内で収まりきれない表現も当然あるわけで、そうした場合は起点言語からの表現や言葉を引用することもある。長年にわたるこうした作業がいわゆる外来語などの形をとって目標言語を拡大してきたのであるが、こうした作業の積み重ねが結果として純粋言語を見つけ出す手がかりともなりえるのである。

フンボルトは全人類共通の普遍的な部分が各言語の言語的特徴によってぼかされていると言っている。言語とは単なる道具ではなく人間の考え方に影響を与える。言葉と人間の考え方の間には相互影響力が働くというのである。言葉は人間が現実を解釈する際に影響を与える動的な力、エネルギーである。このフンボルトの考えはサピア・ウォーフの仮説という言語相対論へと発展する。つまり使用言語と世界の解釈は相対するという説である。空にみえる星はその存在も位置も確固としたひとつの現実である。しかし様々な言語によってそれぞれ違った星座が存在する。これは勝手に非科学的なことではあるが、まったく個人的解釈でもない。それぞれの言語によって言い伝えられ、あるいはその言語によって影響され事実となったのであるが、星座がなくとも星は存在し続ける。つまり星座は星の存在という現実に対して何の必要性も持たない。人間は現実の世界を解釈するために言語を用い、人間と現実世界の間にある言葉の世界を現実として認識している。つまり言語体系とは星座と同じで、現実の世界にとってなんら影響、必要性を持たず、人間の現実の見方の方に影響を与えるのである。

こうした各言語のもつ個別的言語的曖昧さを省いていくと生成変形文法と呼ばれるものが存在するとチョムスキー（Noam Chomsky）は主張する。3章で翻訳の際に核文レベルまで文を分解してから目標言語に翻訳すると書いたが、この核文レベルでは図3のように起点言語と目標言語の隔たりは小さくなる。この核文を更に掘り下げていけばいずれはこの二言語間の距離は全くなり深層言語というただひとつの言語に行き当たる。ここは深層レベルである。このレベルではすべての暗示的なものは明示的になり可能なのは通知だけである。各言語の文体などのすべての特徴が排斥され文学作品を著すことなど到底不可能になる。この深層言語とはチョムスキーがいう生成変形文

図 3



法、すべての言語に共通する普遍文法であり、フンボルトのいうすべての言語の中心、ベンヤミンのいう純粹言語につながる。

カントは認識論的代表作、「純粹理性批判」の中の超越論的感性論と超越論的論理学という両章で、人間の知覚と悟性について述べている。人間は物自体をあるがままに認識することができない。星を見るときに星座の知識が無意識に介入してくるように、物自体を見ているつもりで実はその物に時間と空間を足したものを物自体として認識しているのである。それは人間の感性に属するものの仕組みである。そうして得た情報は人間のいわゆる純粹悟性概念によって整理される。カントはその純粹悟性概念を4つのカテゴリーに分類した。例えば様相のカテゴリーと名づけられたグループには可能性 不可能性、現存性 非存性、必然性 偶然性という3つの選択肢があり、これらにのっとって人間は感性の仕組みで得た情報を処理せざるを得ない。これらカントが意味する悟性とは外部からの影響を全く受けず、全人類が先天的に共通して持ち合わせているものを示している。ゆえに純粹悟性なのである。これらの概念は物体から発せられるものではなく人間側からの介入だ。そうした一切の介入を除き、純粹に物自体を把握する手だてを人はもたない。しかしそれがゆえに人類共通の認識というものが存在することになるのである。全人類共通の間主観的基礎ともいえる。このカントの説をクライスト³²はこんな比喩で表している。もし人類が全員外すことのできない緑色の眼鏡をかけて生まれてきたとしたら世界は緑色として認識される。世界が実際には緑色ではなくてもそれが人類共通の認識であり事実となるのだ。

では言語をこの外すことのできない眼鏡だと例えたらどうなるだろうか。緑色の眼鏡をかけている人もいればピンク色の眼鏡をかけている人たち、あるいは拡大する眼鏡、縮小する眼鏡など様々

な眼鏡をかけた人たちが一つの同じ世界をみていることになる。緑色の世界を見ている人たちはピンク色の世界を見ることができないが、お互いに情報を交換し、相手の視界を想像することができると。つまりこれが翻訳なのである。こうして他眼鏡、他言語間の行き来、情報の交換が盛んになればなるほど、我々が純粹言語、つまり眼鏡を通さない真実の世界（カントの場合の物自体の世界）の存在を認識し垣間見る手立てを得ることに繋がるとはいえないだろうか。

参考文献

- BASNETT-McGUIRE, Susan: *Translation Studies*. London/New York: Routledge 1991
- BELL, Roger T.: *Translation and Translating. Theory and Practice*. London: Longman 1991
- BERKELEY, George: *An Essay Towards a New Theory of Vision*. (1732)
<http://www.maths.tcd.ie/~dwilkins/Berkeley/Vision/1732B/Vision.html>
- COOK, Vivian J.: *Chomsky's Universal Grammar*. Oxford: Basil Blackwell 1988
- HIJIYA-KIRSCHNEREIT, Irmela: „'Stille Post' - Ein Rundgang ” .
In: HIJIYA-KIRSCHNEREIT, Irmela (Hrsg.) *Eine gewisse Farbe der Fremdheit. Aspekte des Übersetzens Japanisch-Deutsch-Japanisch*. München: Iudicium 2001
- HUMBOLDT, Wilhelm von: Einleitung zu Aischylos' Agamemnon (Übersetzung aus dem Griechischen) 1816
- HUMBOLDT, Wilhelm von: „Über das vergleichende Sprachstudium in Beziehung auf die verschiedenen Epochen der Sprachentwicklung ” (1820) . In: *Werke 3: Schriften zur Sprachphilosophie*. Stuttgart: Cotta 1979
- HUMBOLDT, Wilhelm von: „Über die Verschiedenheiten des Menschlichen Sprachbaues ” (1827-1829) . In: *Werke 3: Schriften zur Sprachphilosophie*. Stuttgart: Cotta 1979
- HUMBOLDT, Wilhelm von: „Sprachbau und Entwicklung des Menschengeschlechts ” (1830-1835) . In: *Werke 3. Schriften zur Sprachphilosophie*. Stuttgart: Cotta 1979
- LEVY, Jirf: *Die literarische Übersetzung: Theorie einer Kunstgattung*. Frankfurt 1969
- KOLLER, Werner: „Anmerkungen zu Definitionen des Übersetzungsvorgangs ' und zur Übersetzungskritik (1974) ” in: WILSS, Wolfram (Hrsg.) . *Übersetzungswissenschaft*. Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft 1981
- KOLLER, Werner: *Einführung in die Übersetzungswissenschaft*. Heidelberg: Quelle und Meyer 1992
- LUTHER, Martin: *Sendbrief vom Dolmetschen*. 1530
<http://www.glaubensstimme.de/luther/622.HTM>
- MANTHAËY, Barbara: „Maschinelle Übersetzungen aus dem Japanischen ” .
In: HIJIYA-KIRSCHNEREIT, Irmela (Hrsg.) *Eine gewisse Farbe der Fremdheit. Aspekte des Übersetzens Japanisch-Deutsch-Japanisch*. München: Iudicium 2001
- NIDA, Eugene A.: „Das Wesen des Übersetzens (1975) ” in: WILSS, Wolfram (Hrsg.) . *Übersetzungswissenschaft*. Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft 1981
- POPOVIČ, Anton: „Übersetzung als Kommunikation (1977) ” in: WILSS, Wolfram (Hrsg.) . *Übersetzungswissenschaft*. Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft 1981
- SCHLEIERMACHER, Friedrich: *Über die Verschiedenen Methoden des Übersetzens*. 1813
- SEIDENSTICKER, Edward: “ On Trying to Translate Japanese ” . in: *Encounter II*. 1958
- STOLZE, Rade Gundis: *Übersetzungstheorien: Eine Einführung*. Tübingen: Narr 2001
- VERMEER, Hans J.: “ Zur Beschreibung des Übersetzungsvorgangs (1974) ” in: WILSS, Wolfram (Hrsg.) . *Übersetzungswissenschaft*. Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft 1981
- VERNAY, Henri: „Elemente eine Übersetzungswissenschaft (1974) ” in: WILSS, Wolfram (Hrsg.) . *Übersetzungswissenschaft*. Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft 1981
- WITTKAMP, Robert F.: „Überlegungen zu formalen Aspekten bei der Haiku-Übersetzung ”
In: HIJIYA-KIRSCHNEREIT, Irmela (Hrsg.) *Eine gewisse Farbe der Fremdheit*.

- Aspekte des Übersetzens Japanisch-Deutsch-Japanisch*. München: Iudicium 2001
WUTHENOW, Ralph-Rainer: *Das fremde Kunstwerk*. Göttingen: Vandenhoeck und Ruprecht 1969
村上春樹、柴田元幸：『翻訳夜話』文芸春秋 2000
山岡洋一：『翻訳とは何か・職業としての翻訳』日外アソシエーツ 2001
G・パークリー：『視覚新論』（下條信輔、植木恒一郎、一ノ瀬正樹訳）勁草書房 1990

注

- 1 Vernay (1974) p.237参照
- 2 各言語とその構造上の特徴と表現手段（日本語の場合振り仮名、掛詞、男言葉と女言葉など）、時代と場所による常識・一般知識の違い（江戸時代の人は「冷蔵庫」を知らない。ほとんどのドイツ人は田村正和を知らないから、彼の物まねを見てなぜ面白いのかわからない。）各言語の文体上・美的感覚の標準、文章のジャンル（歴史小説、和歌など）、作者の特徴と背景、翻訳者の翻訳方針と原典の解釈、原典と翻訳の時代とその翻訳伝統、翻訳者の仕事上の実践的条件。
山岡洋一は翻訳のことをスポーツに喩える：「野球もあれば、ボクシングもあり…体力作りの野球もあれば、プロの競技としての野球もある。」山岡 p.17
- 3 Wuthenow (1969) p.176, Koller (1992) p.13, Vermeer (1974) p.150参照
- 4 Vermeer (1974) p.250, Popovic (1977) p.92参照
- 5 例えば経費を節約するため日本の小説を英語の翻訳からドイツ語に翻訳させる（重訳）、あるいは、ドイツの出版社がドイツで人気のあるコンピューターゲームに関する日本語の小説を見つける。その翻訳サンプルを見ると原典は小学生が書いたような文体であることが判明したため、翻訳者にちゃんとしたファンタジー小説に書きかえるよう依頼する、など思いもかけないこといろいろと起こる。
- 6 日本文学の普及を振興するが翻訳される作品の選定に影響を与えるなど。
- 7 各言語・コミュニケーション圏の特徴、例えば文法、暗示的な意味、慣用語、文体など。
- 8 Vermeer (1974) p.257参照
- 9 Nida (1975) 参照
- 10 Analysis. Decoding (コード解読) ともいう。
- 11 Restructuring. Encoding (コード化) ともいう。
- 12 Hijiya-Kirschner (2001) p.19参照
- 13 Manthey (2001) p.248参照
- 14 例えば嫌味な丁寧さ。本当の丁寧さと嫌味な丁寧さを見分けることもかなり難しい。
- 15 George Berkeley: "An Essay Towards a New Theory of Vision" (1732)
- 16 この問題をめぐっても対立する意見がある。ナイダによると翻訳は翻訳文の読者のために行われる。ベンヤミン (Walter Benjamin) は『翻訳者の課題』("Die Aufgabe des Übersetzers ") という論文で、翻訳は原典である文芸作品のために行われるべきで、読者がそれを簡単に分かるかどうかは関係ないと出張する。
- 17 Wittkamp (2001) p.198参照
- 18 Seidensticker (1958) 参照
- 19 G・パークリー：『視覚新論』（下條信輔、植木恒一郎、一ノ瀬正樹訳）
- 20 August Wilhelm Schlegel (1767-1845) . ドイツの哲学者、神学者、翻訳者（シェイクスピアを翻訳）
- 21 Friedrich Daniel Ernst Schleiermacher (1768-1834) . ドイツの神学者、哲学者
- 22 Albrecht von Eyb (1420-1475) . ドイツの文学者、翻訳者
- 23 Niklas von Wyle (1410-1479) . スイスの文学者、翻訳者
- 24 Wilhelm Freiherr von Humboldt (1767-1835) . ドイツの哲学者、言語学者
- 25 Martin Luther (1459-1530) . ドイツの宗教改革者
- 26 Alexander Fraser Tytler, 別名 Lord Woodhouselee (1747-1813) スコットランド人。著作 "Essay on the Principles of Translation" (1791)
- 27 H.G.Carlson. ストリンダベリの英訳者
- 28 Johann Wolfgang von Goethe (1749 - 1832) . ドイツの作家。
- 29 Goethe: Gespräch mit Eckerman, 31. Januar 1827: „Nationalliteratur will jetzt nicht viel sagen; die

翻訳・その思想と現場の問題（デーゲン）

Epoche der Weltliteratur ist an der Zeit, und jeder muß jetzt dazu wirken, diese Epoche zu beschleunigen.”

30 Goethe: *Brief an Thomas Carlyle, vom 20.7.1827*. „Denn, was man auch von der nzulänglichkeit des Übersetzens sagen mag, so ist und bleibt es doch eins der wichtigsten und würdigsten Geschäfte in dem allgemeinen Weltwesen.”

31 Luther: „Sendbrief vom Dolmetschen” 参照

32 Heinrich von Kleist (1777-1811) . ドイツの作者

平成15年10月24日 於 附属図書館ホール

